書　評・紹　介

김두섭・박상태・은기수 편

『한 국 의　인 구』

대전，통계청，2002，729pp.（2 Vols.）

『韓国の人口』と題された韓国統計庁発行の本書は，韓国の人口学者が総力を結集した成果で，現在の韓国人口学の到達水準を示す重要文献である．各章が扱うトピックも，「センサス」「人口増加と人口転換」「出産力」「死亡力」「国際移動」「性・年齢構造」「婚姻状態」「家族と世帯」「教育水準」「職業と産業」「労働力」「高齢者」「分布と移動」「都市化」「通勤・通学と昼間人口」「宗教」「情報化」「人口推計」「人口政策」と多岐にわたる．

2001年の韓国の合計出生率は1.30で，日本の1.33を下回るに至った．전광희の第3章「出産力」では，こうした極低水準への低下に対し，過酷な競争・大衆消費社会・女性の経済力向上・既婚女性の就業と出産・育児の葛藤・中産階層的生活様式への規範的圧力といった社会学的分析を加えている．ただし形式人口学的な要因分解では，パリティや結婚期間を考慮しない年齢別有配偶出生率を用いており，有配偶出生力の効果を過小評価していると思われる．また中絶や婚外出生に関するデータが乏しいことも，人口学的分析を難しくしている．

김태헌の第4章「死亡力」では，死亡率の性・年齢パターンの人口学的分析に加え，差別死亡率と死因構造を分析している．韓国の1999年の平均寿命は男子71.71歳・女子79.22歳であり，2000年の三大死因は悪性新生物・脳血管疾患・心臓疾患の順で，完全に先進国型の死亡パターンになっている．

권태환の第5章「国際移動と海外韓人社会」は，李朝後期以後の出移民史を叙述した上で，中国・日本・米国における韓人社会の現状を分析している．国内にほとんど外国人集団を持たない韓国では，国際移動に関する叙述はこのように出移民中心にならざるを得ないが，OECD諸国中では稀有な例だろう．

韓国では1980年代後半以降，選択的中絶による出生性比の不均衡が続いている．변화순の第7章「婚姻状態」によると，2000年にはこれを原因とする男子の結婚難が既に現れている．また1997年のIMF危機は，韓国人の結婚・離婚行動に決定的な影響を与えたことが示される．その一部として同棲が増えていることを主張するが，この点についてはデータを提示できずにいる．

韓国人口の一極集中は激烈で，人口の半数近くが首都圏（ソウル特別市と京畿道）に居住している．최진호の第13章「人口分布と国内人口移動」では，1990年代前半からソウル市で人口減少が始まり，郊外化の段階に入ったことが報告されている．しかしソウル市周辺部の人口増加率が高いため，首都圏への集中はなお進行中である．既に政府機能の一部が大田広域市に移されていることを考えると，韓国での首都移転計画は日本より実現性が高いように思われる．

データ不足のため一部に不満な点もあるが，各章とも人口研究として十分に高い水準にある．韓国人口の研究者にとって，本書は当分の間必読文献であり続けるだろう．　（鈴木　透）